子供への交通教育は、もう伝統とでもいえそうですね。

モニカ・オルソン

Education for Traffic Seems to be Tradition in between Parents and Children,Since it should be Passed on to Next Generation.

Mrs. Monika Olsson

杉田　書棚に沢山ご本をお持ちですが、中に日本関係も幾冊か並んでいますね。

オルソン夫人　会議に出席の主人と一緒に、日本へは二度行っています。京都や広島にも行き、日本は大好き。11月に主人がボルボ・ジャパンの社長になるので、日本で生活するのを楽しみにしています。

杉田　スウェーデンの運転免許保有率は72.4%と大変高いそうですが、何才のとき免許証を手になさいました？

オルソン夫人　18才にならないととれませんので、その日を待って取得しました。

杉田　最初に乗った車は？

オルソン夫人　もちろんボルボです。スウェーデン人は愛国者で(笑)、スウェーデン製の車をとても大切に思う人が多いのです。私の父もその一人で、スウェーデン製のボルボが大好きで、いつも使っていました。ですから私も運転免許を手にしてから父のボルボに乗り、ボルボからスタートしました。

Volvo Car Corp. 営業担当副社長 Hans Olov Olsson 氏夫人。ゴーテンボルグ生まれ。Olsson氏とは大学の同級生。教育心理学専攻。23才と20才のスウェーデン美人のお嬢さんと４人家族。ボランティア活動で多忙。

杉田　服や靴などと同じように、車の色にも私は関心があるのですが、ミセス・オルソンのお好きな車の色は？

オルソン夫人　今アイボリーに乗っていますが、赤も好き。赤といってもワインカラーというか、少々落ち着いた赤。一般的には白が多いですね。ボルボ社での売上げも、白と赤が圧倒的に多いのではなかったかしら。

杉田　お買物には車で行きますか。

オルソン夫人　私達の住んでいるここは、市の中心からそう離れてないし、近くにショッピングセンターもあって便利なので、手軽な買物はそこでします。有名なデパートNKに行くときは車ですね。夏の間、週末はサマーハウスに行ってすごしますので、片道２時間のドライブを楽しみます。主人は出張が多くて一緒に行けないことがあるので、娘と一緒だったり、一人だったりしますが、郊外のドライブは大好き。車はそう多くはないので、快適なドライブです。スウェーデンの夏は本当にきれいですよ。

杉田　道路が混んでいないのは、うらやましい。初夏のころボルボ社のジレンハマー会長が「都市周辺の交通渋滞解消と大気汚染防止のためには、もはや大都市部でマイカーなど個人の車の乗入れ禁止か、乗入れ車に月額30ドル程度のパスを買わせるようにしたらどうか」という発言をなさったそうですが。

オルソン夫人　ここゴーテンボルグ市はスウェーデンでも第二の都市といわれて、人口は近郊を含め40万人。朝夕のラッシュ時に渋滞が見られても、そうひどい渋滞ではなく、まだ大問題にはなりません。しかし、首都ストックホルムは150万人。朝夕の混雑はこのところさらにひどくなっているそうですよ。それでも、どの車も用があって町に入ってくるので、無用の人はいないのですから、ラッシュ時に市中心に入る車から〝入場料〟をとるといったら、どの車も支払わざるをえないといってい

インタビュアー
杉田　房子
本誌編集委員。旅行作家としてほぼ世界をまわる。専門は海外紀行文、国際生活文化比較論。最近は日本ナショナル・トラストの理事として、自然・歴史遺産に関心を持つ。

ます。予想としては25%車が減ると見込んでいるそうですが、どんなものでしょうか。

杉田　車が多くなれば、道路上の駐車も問題になりますよね。駐車違反なさったことありませんか。

オルソン夫人　私はありませんが、つい先日友人がストックホルムで夕食をとるため店の近くの路上に駐車していたら、違反のカードが貼られていてびっくりしていました。そこは、以前たしか違反にならないところだったので駐めたのに、現在は禁止区域に入っていたんですね。そこで500クローネ（約1万円）の罰金をとられたそうです。

杉田　罰金の支払方法は？

オルソン夫人　最近は郵便局で払い込む方法がとられています。2週間以内に払い込まないと、20%の利子が加算されていくので、その友人は仕方ないと涙をのんで数日のうちに郵便局へ行ったそうです。警察官が駐車取締りをするのではなく、代行の会社がいくつもあるので、違反車はすぐ貼られてしまうのですね。

杉田　スウェーデンは、人と車のつき合い方というのか、交通に関する教育が子供のときからすすめられているそうですが、どんな方法なのですか。

オルソン夫人　上の娘は今23才。だいぶ前のことではっきり記憶しておりませんが、たしか4才になると申込み用紙が送られてきて、申込むと毎月数枚の絵やテープが届きます。代金は年間100クローネ(約2,000円）ほどですか。母親と子供が一緒になって、読んだり、切り抜いて貼ったり、テープの音楽に合わせて歌ったり。子供が親になれば同じことをするので、教育というよりは伝統とでもいえそうです。

杉田　例えば、どんな切り抜きを……。

オルソン夫人　例えば、祖母と孫との会話があって、「オバアサン、外に出ていい？」「外は雪が降っているでしょう、着ていくものは？」と帽子、手袋、長靴……というように、紙に書いてある絵から切り抜いて、もう一枚の絵の子供に付けていくのです。その絵の子供二人が手をつないで横断歩道の前で立っています。信号の色はありません。立っているときの信号は何色かしら？　そう、赤を貼りましょうネ、とお話しながら教えていくわけです。

杉田　お子さんは面白がりながら自然と交通のルールを身につけていくのですね。

オルソン夫人　そうです。今は白夜の名残りで明るいからいいのですが、冬になると暗い時間の方が多いので、子供たちが外出のとき、ハートや動物の形をした反射鏡の役目をする布を背中にピンでつけてやります。小さい子供の長靴は車のライトに反射するだけでなく、暗い道でも光るようできていますよ。

杉田　ボルボ社は子供用の安全座席にも力を入れているのでしたね。

オルソン夫人　そうです。バックシートに進行反対側に向けた席をつけたり、椅子を高くしてシートベルトをつけやすいようにしたり、安全のための開発に力を入れているのはいいことではありませんか。

杉田　ところで、自動車会社の重役さんは大変においそがしくて、朝早く会社に出かける方が多いそうですが、ミスター・オルソンは如何ですか。

オルソン夫人　そう、6時に起き、7時半には出かけます。

杉田　朝食のご用意をなさいますか。

オルソン夫人　主人が自分でやりますの(笑)。チーズとハムの2つのサンドウィッチにレタスやトマトを添えるのが決まった朝食。

杉田　ありがとうございました。まだまだお話したいのですが……。

インタビュー後記

（ゴーテンボルグのご自宅でインタビューさせていただいた。一九一〇年建築のマンション三階、部屋数七つの広々とゆったりした住居環境。オルソン氏は黙って見守るだけ。ソファに静かに席を応対するインタビュー。飲み物にも気を配りながら、時折鳴る電話のベルに、夫人へのインタビュー、スウェーデンの生活、貴重な体験だった。）

（施実　1989年9月4日）